

## 動詞連用形の連濁と語構成

— 目的格関係の場合 —

### Rendaku of Compound Gerund and Word Structure in Objective Case

経営学部現代経営学科

呂 建輝

RO, Kenki

Department of Contemporary Business

Faculty of Business Administration

**要旨：**動詞連用形を後部要素とする複合語は、前接部が目的格名詞であるときは連濁が起りにくいとされている。しかし連濁が起こる例外も多い。これまでの研究で、ヒトや道具などを表す場合は連濁せず、コトを表す場合は連濁するという見方がある。しかし、コトを表す場合も連濁しない語がある（草刈り、泥鰯掬いなど）。目的格関係の複合語を考察する際、後部要素の動詞連用形が動詞的に働くことを前提としている（草刈り＝草を刈ること）。しかし独立した用法をもつ動詞連用形の場合、名詞的に働いていると考えることもできる（鹿狩り＝鹿の狩り）。本稿では、独立用法をもたない動詞連用形を収集し、それらを後部要素とする語例に対して考察を行った。その結果、目的格関係の複合語はほとんど連濁が起こらないことがわかった。また、目的格関係で連濁が起こらないのは、具体的な行動を表すことにより、意味がぼやけていて多義的に捉えられるという和語本来の性質から離れているからである。

**Abstract：**Most of compound gerunds, formed by objective noun, is considered to be not affected by Rendaku. Especially, Rendaku affects those which mean ACTIONS but not JOBS or TOOLS, etc. However, there are many exceptions in case of ACTIONS. It is a precondition that the gerund should function only as a verb when following objective noun. In this paper, we remark on the compound gerunds without independent noun form. We came to the conclusion that at most times, Rendaku does not affect compound gerunds when the first element works as object to the second element, for they have departed from the feature of Japanese Word by meaning concrete ACTIONS.

**キーワード：**連濁、和語、語構成、目的格、動詞連用形

**Keywords：**Rendaku, Japanese Word, Word Structure, Objective Case, Compound Gerund

#### 1. はじめに

動詞連用形を後部要素とする複合語の連濁について、前部要素が後部要素の目的格である場合、一般的に連濁が起りにくいとされている。「なで切り（なでぎり）」「厚切り（あつぎり）」は連濁するのに対して「腹切り（はらきり）」「封切り（ふうきり）」は連濁しない、という事象もこの法則で説明することができる。つまり、「腹切り」「封切り」の前部要素「腹」「封」が「切り（切る）」の目的格であるため、連濁が阻止されたと考えられる。この「目的格では連濁を起こさない」という法則は、金田一（1976）によると、奥村三雄が国語学会編『国語学辞典』の「連濁」の項

を執筆する際に取り上げたものである。

一方、前部要素が後部要素の目的格であるにもかかわらず連濁が起こる、というような例外も数多く見られる。例えば、「人殺し（ひとごろし）」と「犬殺し（いぬころし）」では、どちらも前部要素が後部要素の目的格である。しかし前者には連濁が起こり、後者には連濁が起こらない。これについて、中川（1966）は「語彙分化の問題がある」と指摘する。「人殺し」は人を殺すコトを表しているのに対して、「犬殺し」は犬を殺すヒトを表している。この意味用法上の違いが連濁に影響を与えたという主張である。さらに、佐藤（1989）はヒトに限らず、「水差し（みずさし）」「爪

切り(つめきり)」といった道具を表す語や、「ア  
クイ」「カマキリ」といった生き物の名前となる語も、  
連濁が起こらないとしている。

しかし、同じくコトを表す場合も、違う後部要素  
によって連濁が起こったり起こらなかったりする事  
象が観察される。例えば、以下に挙げる「刈り」と  
「狩り」は両方とも「かり」と読むが、目的格となる  
語を前接するとき、前者は濁らず、後者は濁る。以  
下の語例は『NHK日本語発音アクセント辞典』(以下  
「NHK辞典」)による。

#### 〜刈り

【清】 稲刈り(いねかり) 柴刈り(しばかり)  
芝刈り(しばかり) 草刈り(くさかり)  
麦刈り(むぎかり)

#### 〜狩り

【濁】 くま狩り(くまがり) 鹿狩り(しかがり)  
猪狩り(ししがり) 茸狩り(たけがり)  
虎狩り(とらがり) 松茸狩り(まつたけがり)  
桜狩り(さくらがり) 紅葉狩り(もみじがり)  
蛍狩り(ほたるがり) 野犬狩り(やけんがり)  
首狩り(くびがり) 魔女狩り(まじょがり)

以上から分かるように、前部要素と後部要素が目的  
格関係を成す語で、「〜刈り」はすべて清音形であり、  
「〜狩り」はすべて濁音形である。それぞれの複合語  
の表す意味から見ても、「〜刈り」「〜狩り」は両方と  
もコトを表している(草刈り=草を刈るコト、鹿狩  
り=鹿を狩るコト)。この清濁の違いはどこから生じ  
たのだろうか。

## 2. 二種類の語構成

「名詞+動詞連用形」の語構成を考える際、後部要  
素の「動詞連用形」は一般的に動詞的成分として扱  
われている。動詞的成分として扱っているからこそ、  
「目的格関係」かどうかの観点での分析が可能なので  
ある。例えば「鹿狩り」の語構成を考える際、一般  
的には以下のようなプロセスでできたと考えられて  
いるのであろう。

【ア】[鹿(を)狩る]  $\xrightarrow{\text{名詞化}}$  鹿狩り

しかし、そもそも「狩り」という独立した名詞も存  
在している。「NHK辞典」に見出し語として掲載され

ているほか、以下のような用例も「現代日本語書き言  
葉均衡コーパス 少納言」(以下「少納言」)から拾え  
る。

・ちょうどよい、酔い醒ましに狼の狩りをしてやろ  
う 森村誠一『地果て海尽きるまで』

つまり「鹿狩り」は以下で示すように、単純に名詞  
と名詞の結合であると考えられる。

【イ】[鹿(の)狩り]  $\xrightarrow{\text{一語化}}$  鹿狩り

一方「刈り」という独立した語形は、「NHK辞典」  
にもなく、「少納言」などのコーパスにも用例が見当  
たらない。「刈り」という動詞連用形は単独では使え  
ない。よって、以上の語構成【イ】ではなく、語構成  
【ア】でできた語であると考えられる。

【ア】[草(を)刈る]  $\xrightarrow{\text{名詞化}}$  草刈り

目的格関係で連濁が起こるかどうかの考察をする  
際、まずは「〜狩り」のように、後部要素が単独用法  
(名詞)をもち、語構成【イ】で解釈できるものを取り  
除く必要がある。そこで本稿では、語構成【ア】で  
しか解釈できないもの、つまり後部要素が単独用法  
(名詞)をもたない複合語を対象に、前部要素が後部  
要素の目的格である場合の連濁を再考察する。

## 3. 語例収集

考察にあたり、まず前部要素が後部要素の目的格  
で、かつ後部要素の動詞連用形に単独用法を持たない  
語例を収集した。一般の国語辞書には、古語や位相語  
といった普遍的に使用されていない語も収録されてい  
るため、本稿では語例収集の際、日常生活でよく使わ  
れる語彙を中心に収録した「NHK辞典」を使用した。  
集められた語例を「A. 清音形しかない後部要素」と  
「B. 濁音形がある後部要素」に分けると、以下のとお  
りである。

### A 清音形しかない後部要素

#### A1 ~飼い

【清】 牛飼い(うしかい) 羊飼い(ひつじかい)  
鶉飼い(うかい)

A2 ～切り

【清】巾着切り（きんちゃくきり） 根切り（ねきり）  
葛切り（くずきり） そば切り（そばきり）  
爪切り（つめきり） ねじ切り（ねじきり）  
ガラス切り（がらすきり） 封切り（ふうきり）  
水切り（みずきり） 縁切り（えんきり）  
缶切り（かんきり） 腹切り（はらきり）  
首切り（くびきり）

A3 ～食い

【清】冷や飯食い（ひやめしくい）  
蟻くい（ありくい）

A4 ～汲み

【清】水汲み（みずくみ） 潮汲み（しおくみ）  
茶汲み（ちゃくみ）

A5 ～消し

【清】艶消し（つやけし） インク消し（いんくけし）  
帳消し（ちょうけし） 毒消し（どくけし）  
火消し（ひけし） 色消し（いろけし）

A6 ～差し

【清】札差し（ふださし） 水差し（みずさし）  
油差し（あぶらさし） 状差し（じょうさし）

A7 ～知り

【清】物知り（ものしり） 訳知り（わけしり）

A8 ～炊き

【清】ごはん炊き（ごはんたき） 飯炊き（めしたき）

A9 ～摘み

【清】綿摘み（わたつみ） 花摘み（はなつみ）  
茶摘み（ちゃつみ）

A10 ～解き

【清】謎解き（なぞとき） 絵解き（えとき）

A11 ～掃き

【清】煤掃き（すすはき） 眉掃き（まゆはき）

A12 ～弾き

【清】三味線弾き（しゃみせんひき）

A13 ～吹き

【清】灰吹き（はいふき） 笛吹き（ふえふき）  
霧吹き（きりふき）

A14 ～拭き

【清】手拭き（てふき） 汗拭き（あせふき）  
足拭き（あしふき）

A15 ～踏み

【清】雪踏み（ゆきふみ） 麦踏み（むぎふみ）

A16 ～掘り

【清】井戸掘り（いどほり）  
根掘り葉掘り（ねほりはほり）  
穴掘り（あなほり） 芋掘り（いもほり）

A17 ～隠し

【清】釘隠し（くぎかくし） 尻隠し（しりかくし）  
柱隠し（はしらかくし） 目隠し（めかくし）  
耳隠し（みみかくし）

A18 ～掬い

【清】泥鰯掬い（どじょうすくい）  
小またすくい（こまたすくい）

A19 ～倒し

【清】棒倒し（ぼうたおし）

A20 ～叩き

【清】鉦叩き（かねたたき） はいたたき  
肩叩き（かたたたき） 鉢叩き（はちたたき）  
鐘たたき（かねたたき）

A21 ～垂らし

【清】洩垂らし（はなたらし）

A22 ～誑し

【清】女たらし（おんなたらし）

A23 ～更かし

【清】夜更かし（よふかし）

A24 ～狂わせ

【清】番狂わせ（ばんくるわせ）

B 濁音形がある後部要素

B1 ~掛け・~懸け・~架け

- 【清】謎掛け(なぞかけ) ひじ掛け(ひじかけ)  
刀掛け(かたなかけ) 腰掛け(こしかけ)  
手ぬぐい掛け(てぬぐいかけ)  
洋服掛け(ようふくかけ) 稲架け(いなかけ)  
袋掛け(ふくろかけ) 餡かけ(あんかけ)  
足かけ(あしかけ)  
【濁】襷掛け(たすきがけ) 命懸け(いのちがけ)  
ぞうきんがけ

B2 ~漬け

- 【濁】梅漬け(うめづけ) 菜漬け(なづけ)  
青梅漬け(あおうめづけ)

B3 ~積み

- 【濁】荷積み(にづみ)

B4 ~取り

- 【清】お水取り(おみずとり) 舵取り(かじとり)  
糟取り(かすとり) 茸取り(きのことり)  
ごみ取り(ごみとり) 塵取り(ちりとり)  
鼠取り(ねずみとり) 頭垢取り(ふけとり)  
カルタ取り(かるたとり) 判取り(はんとり)  
ゲーム取り(げーむとり) 年取り(としとり)  
人気取り(にんきとり) 命取り(いのちとり)  
借金取り(しゃっきんとり)  
天下取り(てんかとり) 弓取り(ゆみとり)  
婿取り(むことり) 嫁取り(よめとり)  
明かり取り(あかりとり) 汗取り(あせとり)  
注文取り(ちゅうもんとり)  
炭取り(すみとり) 点取り(てんとり)  
物取り(ものとり) 相撲取り(すもうとり)  
田の草取り(たのくさととり)  
種取り(たねとり) 糸取り(いととり)  
草取り(くさととり) 草履取り(ぞうりとり)  
陣取り(じんとり) 音頭取り(おんどとり)  
【濁】棲取り(つまどり)

B5 ~挽き

- 【清】肉挽(にくひき)  
【濁】木挽(こびき)

B6 ~干し

- 【清】物干し(ものほし)

- 【濁】しらす干し(しらすほし) 梅干し(うめほし)

B7 ~立て

- 【清】箸立て(はしたて) 本立て(ほんたて)  
ろうそく立て(ろうそくたて) 目立て(めたて)  
矢立て(やたて) 筆立て(ふでたて)  
腕立て(うでたて) 花立て(はなたて)  
針立て(はりたて) 鏡立て(かがみたて)  
【濁】願立て(がんだて) 簀立て(すだて)

B8 ~冷まし

- 【清】熱冷まし(ねつさまし)  
【濁】爛冷まし(かんざまし) 湯冷まし(ゆざまし)

B9 ~覚まし

- 【濁】目覚まし(めざまし)  
眠気覚まし(ねむけざまし)  
酔い覚まし(よいざまし)

B10 ~尽かし

- 【濁】愛想尽かし(あいそづかし)

B11 ~尽くし

- 【濁】心尽くし(こころづくし)

B12 ~晴らし

- 【濁】意趣晴らし(いしゅばらし)  
憂さ晴らし(うさばらし) 気晴らし(きばらし)

B13 ~減らし

- 【濁】人減らし(ひとべらし)

B14 ~揃え

- 【濁】馬揃え(うまぞろえ)

B15 ~越し

- 【清】年越し(としこし)  
【濁】すだれ越し(すだれごし) 喉越し(のどごし)  
襖越し(ふすまごし) 冬越し(ふゆごし)  
垣根越し(かきねごし) 塀越し(へいごし)  
壁越し(かべごし) 宵越し(よいごし)  
山越し(やまごし) 川越し(かわごし)  
敷居越し(しきいごし) 窓越し(まどごし)  
眼鏡越し(めがねごし) 葉越し(はごし)  
頭越し(あたまごし)

「A 清音形しかない後部要素」のうち、A2「切り」、A3「食い」、A5「消し」は下掲のように、確かに独立しているように見える用法がある。しかし、「切りがいい」「(釣り用語) 魚の食い」「(囲碁用語) 白／黒模様の消し」は特定の言い方(慣用表現)、または特定の場面ではしか使えない言い方である。

- ・修吾にとって、還暦を迎えるときに一つの役割を終えるのは切りがいい 坂上弘「近くて遠い旅」
- ・昼間だから魚の食いが悪いのは分っている 岡松和夫「口紅」
- ・黒2と受けたのが実戦で、白3の消しに回りました 加藤正夫「パワーアップ定石・序盤」

また、A17「隠し」は動詞「隠す」の持つ「見えないようにする」という意味ではなく、「隠しポケット」という言葉を短縮してできた言い方であると考えられる。

- ・一步一步近づきながら、ズボンの隠しに突っ込んでおいた、あの〈招待状〉を引っぱり出すと 唐十郎「佐川君からの手紙」

このように、A2「切り」、A3「食い」、A5「消し」、A17「隠し」は単独用法を持っているが、複合語の中で名詞的成分として働いていないと考えられる。したがって、本研究で考察対象とする。

ただし、B15「越し」の語例については、金田一(1976)が指摘するように、「ヲ格」で「経過」を表わすもので、「目的格」と区別して扱うべきである。そのため、本研究の考察対象としない。

#### 4. 考察

以下で、独立用法を持たない動詞連用形A1～A24、B1～B14の語例のうち、濁音形の語例を中心に考察する。

濁音形の語例のうち、B1の「襷掛け」は「襷を身に付けている」という意味である。似ている用法として、「浴衣がけ」「草履がけ」などもよく使用されていることから、「～がけ」は「～を身に付けている」という意味を持つ後接形式になっていると考えた方が妥当であろう。『日本国語大辞典 第2版』にも、以下のような説明が見られる。

- ・がけ【掛・懸】〔接尾〕(1) 名詞に付いて、それ

を身に着けている意を表わす 『日本国語大辞典 第2版』

その他「ぞうきんがけ」は鼻音「ん」の前接により連濁が起こったと考えられる。これに対して、似たような用法で鼻音の前接がない例として「掃除機掛け」がある。以下のように清音で使われることが分かる。

- ・結構な運動量に匹敵するのは、床拭き、モップ・掃除機かけ、風呂掃除、庭の草むしり、家具の移動など 「最期まで自宅ひとり」貫くためにするべきこと」『週刊朝日』2017年11月24日

B2の「梅漬け」「菜漬け」「青梅漬け」は、「梅、菜(菜っ葉)、青梅を漬けたもの」というよりも、「～漬け」が漬物の種類を表す後接形式になっていると考えられる。『日本国語大辞典 第2版』にも、以下のような説明が見られる。

- ・づけ【漬】曰〔語素〕<sup>(中略)</sup>(2) 食品の材料の名称を表わす名詞などについて、その物を漬けて作ったものであることを示す。「大根づけ」「白菜づけ」など。(3) 地名などについて、その地の特産の漬け物の名称とする。「奈良づけ」「朝鮮づけ」など。(4) その他、さまざまな名詞や固有名詞について、そうした特徴をもった、その名詞にちなんだ漬け物の名称とする。「べつたら漬」「沢庵漬」「福神漬」など 『日本国語大辞典 第2版』

B2「～漬け」に似たような用法として、B6の「しらす干し」「梅干し」がある。「～干し(ほし)」という後接形式で、乾物の種類を表していると考えられる。「しらす干し」「梅干し」以外にも、「素干し」「塩干し」「みりん干し」「一夜干し」「煮干し」「開き干し」「丸干し」「切り干し」などが挙げられ、全て濁音で使われている。B2「～漬け」とB6「～干し」のように、「漬物」「乾物」のうちどの種類にあてはまるものかを示す用法を、呂(2018)は「細分性」用法と呼び、音韻上では「清濁のどちらか一方に集中し、安定している」としている。「～漬け」「～干し」は和語であるため、濁音形で使われていると考えられる。

B3の「荷積み」以外の語もすべて濁音形で使われている(山積み、下積みなど)ことから、「積み」が後部要素として使われるとき必ず濁音形になるというルールが存在する可能性がある。その理由については不明である。ただし、「荷積み」に関連し『日本国語

大辞典 第2版』に「荷積港 (につみこう)」「荷積人 (につみにん)」「荷積船 (につみぶね)」という見出し語があり、いずれも清音形で出現している。後部要素でなくなると、濁音形が清音形に変わるという現象が観察される。

B4の「褌取り」には、動詞形「褌取る」があり、「NHK辞典」に見出し語として掲載されている。岩岡(2002)によると、「名詞+動詞」は連濁をおこし、それに呼応する「名詞+動詞連用形」も連濁をおこす。「褌取り」が濁って読むのは、それに呼応する動詞形「褌取る (つまどる)」があるからだと考えられる。

B5の「木挽き」は、前部要素「木」が「こ」と読み、単独では使えない音形である。そのため、「木を挽く」という複合語意識が薄まり、金田一(1976)が指摘するように、前部要素と後部要素の関係が緊密になることにより、連濁が起こったと考えられる。

B7の「願立て」は鼻音「ん」の前接により連濁が生じたものと考えられる。「簀立て」は、満潮の時に海中に簀を立てておき、干潮になって逃げおくれた魚を捕る、という漁法を指している。呂(2020)は、「複合語の前部要素と後部要素に助詞を入れたり活用形にしたりしても意味に大差が生じない語構成」のことを「語の並置」と呼び、連濁が起こりにくいと指摘した。目的格関係で連濁が起こりにくいのも、元の動詞形に戻しても意味の大差が生じず「語の並置」にあたるからである。しかし「簀立て」はただ単に「簀を立てる」ことだけでなく、それ以上の情報(魚の捕り方など)が含まれている。「語の並置」にあたらなため、連濁が起こったものと考えられる。似たような用法として、B14の「馬揃え」がある。これも、ただ「馬を揃える」ことではなく、それ以上の情報(武家時代、士気を鼓舞するために行った軍馬の優劣検分)が含まれているため、「語の並置」にあたらず、連濁が起こったと考えられる。

問題となるのはB8~B13、およびB1の「命懸け」である。B8、B13についてはまた後述するが、B1の「命懸け」およびB9~B12の語例を分析するため、前接部を以下に挙げる。

- B1 命懸け 前接部：命
- B9 目覚まし 前接部：目
- 眠気覚まし 前接部：眠気
- 酔い覚まし 前接部：酔い
- B10 愛想尽かし 前接部：愛想
- B11 心尽くし 前接部：心

- B12 意趣晴らし 前接部：意趣
- 憂さ晴らし 前接部：憂さ
- 気晴らし 前接部：気

B1の「命」、B9の「眠気」「酔い」、B10の「愛想」、B12の「意趣」「憂さ」「気」は、いずれも抽象名詞であることが分かる。B9の「目」も「目を覚ます」という表現では具象的な「眼球」ではなく、抽象的に「意識が戻る」という意を表わしている。B11の「心」も具象的な「心臓」ではなく、抽象的に「ある物事に取り組む意志を貫く」ことを表している。

対照的に、清音形の語例を見てみると、〈表1〉のように前接部が具象名詞の語がほとんどである。

〈表1〉清音形語例の前接部の具象性

語例		前接部	語例		前接部
A1	牛飼い	牛 ○	謎掛け	謎	×
	羊飼い	羊 ○	ひじ掛け	ひじ	○
	鶉飼い	鶉 ○	刀掛け	刀	○
A2	巾着切り	巾着 ○	腰掛け	腰	○
	根切り	根 ○	手ぬぐい掛け	手ぬぐい	○
	葛切り	葛 ○	洋服掛け	洋服	○
	そば切り	そば ○	稲架け	稲	○
	爪切り	爪 ○	袋掛け	袋	○
	ねじ切り	ねじ ○	餡かけ	餡	○
	ガラス切り	ガラス ○	足かけ	足	○
A3	封切り	封 ○	お水取り	お水	○
	水切り	水 ○	舵取り	舵	○
	縁切り	縁 ×	糟取り	糟	○
	缶切り	缶 ○	茸取り	茸	○
	腹切り	腹 ○	ごみ取り	ごみ	○
	首切り	首 ○	塵取り	塵	○
	冷や飯食い	冷や飯 ○	鼠取り	鼠	○
	蟻くい	蟻 ○	頭垢取り	頭垢	○
	水汲み	水 ○	カルタ取り	カルタ	?
	潮汲み	潮 ○	判取り	判	○
A4	茶汲み	茶 ○	ゲーム取り	ゲーム	×
	艶消し	艶 ○	年取り	年	×
A5	インク消し	インク ○	人気取り	人気	×
	帳消し	帳 ○	命取り	命	×
	毒消し	毒 ○	借金取り	借金	×
	火消し	火 ○	天下取り	天下	?
	色消し	色 ○	弓取り	弓	○
	札差し	札 ○	婿取り	婿	○
A6	水差し	水 ○	嫁取り	嫁	○
	油差し	油 ○	明かり取り	明かり	○
	状差し	状 ○	汗取り	汗	○
A7	物知り	物 ?	注文取り	注文	?
	訳知り	訳 ×	炭取り	炭	○
A8	ごはん炊き	ご飯 ○	点取り	点	?
	飯炊き	飯 ○	物取り	物	○
A9	綿摘み	綿 ○	相撲取り	相撲	?
	花摘み	花 ○	田の草取り	田の草	○
	茶摘み	茶 ○	種取り	種	○
A10	謎解き	謎 ?	糸取り	糸	○
	絵解き	絵 ○	草取り	草	○
A11	煤掃き	煤 ○	草履取り	草履	○
	眉掃き	眉 ○	陣取り	陣	○
A12	三味線弾き	三味線 ○	音頭取り	音頭	○

A13	灰吹き	灰	○	B5	肉挽	肉	○
	笛吹き	笛	○	B6	物干し	物	○
A14	霧吹き	霧	○	B7	箸立て	箸	○
	手拭き	手	○		本立て	本	○
A15	汗拭き	汗	○		ろうそく立て	蠟燭	○
	足拭き	足	○		目立て	目	?
A16	雪踏み	雪	○		矢立て	矢	○
	麦踏み	麦	○		筆立て	筆	○
A17	井戸掘り	井戸	○		腕立て	腕	○
	根掘り葉掘り	根/葉	○		花立て	花	○
	穴掘り	穴	○		針立て	針	○
A18	芋掘り	芋	○		鏡立て	鏡	○
	釘隠し	釘	○	B8	熱冷まし	熱	?
	尻隠し	尻	○				
	柱隠し	柱	○				
A19	目隠し	目	○				
	耳隠し	耳	○				
A20	泥鰯掬い	泥鰯	○				
	小またすくい	小また	○				
A21	棒倒し	棒	○				
	鉦叩	鉦	○				
	はいたたき	蠅	○				
	肩叩き	肩	○				
	鉢叩き	鉢	○				
A22	鐘たたき	鐘	○				
A23	洩垂らし	洩	○				
A24	女たらし	女	○				
	夜更かし	夜	?				
	番狂わせ	番	×				

※ ○ = 具象名詞  
 × = 抽象名詞  
 ? = 具象名詞と抽象名詞の中間

以上から、前接部が抽象名詞の場合は連濁しやすく、具象名詞の場合は連濁しにくい傾向があるといえる。では、なぜこのような傾向がみられるのだろうか。

ここで、清音形の語例「泥鰯すくい」と濁音形の語例「眠気覚まし」を挙げて説明する。「泥鰯すくい」では、具象名詞「泥鰯」が前接することにより、意味の面でも「泥鰯をすくう」という具体的な行動を指している。これに対して、「眠気覚まし」では、抽象名詞「眠気」が前接するため、意味の面では「眠気を覚ます」ことはわかるが、具体的な行動としてコーヒーを飲むのか、散歩に行くのかは明示されていない。つまり、「泥鰯すくい」は具体的な行動を指しているのに対して、「眠気覚まし」はより上位にある、ヒトを行動に駆り立てる目的のような意味を表している。以下、(1)は言えるのに対して(2)は言えないのも、まさに「泥鰯掬い」が「眠気覚まし」より意味が狭いからであろう。

- (1) 眠気覚ましに泥鰯掬いをする (○)  
 (2) 泥鰯掬いに眠気覚ましをする (×)

以上の考察から、B1の「命懸け」およびB9～

B12が連濁するのは、抽象名詞が前接することにより、具体的な行動を表す用法ではないからだと考えられる。この考え方で、B8の「熱冷まし」は連濁しないのに対して、「爛冷まし」「湯冷まし」は連濁する事象も説明できるようになる。「爛」「湯」を冷ますために、「爛」「湯」のもつ「熱」を冷ます必要があるからである。つまり、「爛冷まし」「湯冷まし」は「熱冷まし」に比べ、行動の具体性を欠くため、連濁が起こったと考えられる。B13の「人減らし」については、前接部「人」は具象名詞のように見えるが、「人減らし」という語においては「人間」「人体」ではなく「人数」という抽象名詞として使用されている。そのため、連濁が起こったものと考えられる。

このように、具象名詞が前接するか抽象名詞が前接するかで、複合語の表す意味も具体的になったり、ぼやけたりする。本来、和語という語種は漢語に比べ、表す意味がぼやけており、多義的に捉えられることが多い。例えば「宿題を出す(和語)」という場合、「宿題を先生に出す」「宿題をカバンの中から出す」「先生が学生に宿題を出してやらせる」など、異なる場面によって異なる意味に捉えられている。一方、「宿題を提出する(漢語)」という場合となると、「宿題を先生に出す」という意味にしか捉えられなくなる。動詞連用形に具象名詞が前接すると、複合語の表す意味が具体的になり、意味上、より漢語に近い存在になる。漢語は基本的に連濁が起こらないため、動詞連用形に具象名詞が前接する複合語も漢語にならって、連濁が起こらなくなったのではないだろうか。

鈴木(2009)は、動詞連用形の表す「動作性」の意味から離れ、「状態性」の意味を獲得した場合に連濁が起こると指摘している。「動作性」の意味、つまり本稿でいう「具体的な行動」を表す複合語は、和語が備えるべき性質とは相反するものとして、連濁が阻止された。そして、前部要素と後部要素が目的格関係を成す複合語の中に、〈表1〉のように特に「具体的な行動」を表すものが多い。そのため、目的格関係では基本的に連濁が起こらないという結果となったのではないだろうか。

## 5. まとめ

本稿では、動詞連用形を後部要素とする複合語のうち、前部要素が後部要素の目的格である場合の連濁を再考察した。後部要素の動詞連用形が独立した用法を持つ場合、語構成上「目的語(を)動詞」ではなく、「名詞の名詞」からできたとも考えられる。そのため、

本稿で再考察を行う際、独立した用法をもたない動詞連用形を後部要素とする語のみを対象にし、語例を収集して分析を行った。

結論として、前部要素が後部要素の目的格である場合、連濁がほとんど起こらないことがわかった。目的格関係の複合語では、動詞連用形に具象名詞が前接することが多く、意味上「具体的な行動」を表している。これは、意味がぼやけていて多義的に捉えられるという和語本来の性質から離れている。その結果、連濁が阻止され、清音で使われていることが明らかになった。

### 参考文献

- 平野尊識（1974）「連濁の規則性と起源」『文學研究』  
71
- 岩岡登代子（2002）「連濁と日本語」『文學』3-4 岩  
波書店
- 金田一春彦（1976）「連濁の解」『Sophia Linguistica』  
2
- 中川芳雄（1966）「連濁・連清（仮称）の系譜」『国語  
国文』35-6
- 呂建輝（2018）「「～ホン（本）」の連濁について：現  
代語を中心に」『西日本国語国文学』5
- 呂建輝（2020）「連濁しない和語の一側面」『環太平洋  
大学研究紀要』16
- 佐藤大和（1989）「複合語におけるアクセント規則と  
連濁規則」杉藤美代子（編）『日本語の音声・音韻  
（上）』明治書院
- 鈴木豊（2009）「動詞連用形転成名詞を後部要素とす  
る複合語の連濁」『文京学院大学外国語学部文京学  
院短期大学紀要』8
- 戸田綾子（1998）「現代和語の連濁：語構成から」『日  
本語・日本文化研究』6

### 付記

本稿は科学研究費補助金（若手研究，課題番号  
19K13207）による研究成果の一部です。